



海外孤児との 絵手紙交流再開

第一学院高生が7年ぶり

ネパール宛て準備

第一学院高校長野キャンパス＝岡田町＝の生徒が、コロナ禍の影響などで休止していた海外の孤児との絵手紙交流について、相手国を南アジアのネパールに切り替えて7年ぶりに再開させる。キャンパス内で希望者を募り、現地の孤児施設入所者に宛ててメッセージや絵をかき、仲介人の山岳ガイド大場淳治さん(62)＝北安曇郡池田町＝に5月中旬に届けてもらう。

同キャンパスと海外ランディアに取り組み孤児の交流は、過去の 大場さんの提案を受けヒマラヤ登山をきっかけ、2011(平成23)～19年にカンボジアのカンボジアなどアの孤児施設との間で孤児支援など国際ポ 実施。年一回ペースで

同国を訪れていた大場さんを介し、相互に絵手紙をやりとりした。その後、コロナ禍による大場さんの活

動休止に伴い、交流も途絶えていた。交流の再開は、大場さんが山岳トレッキング

グをする日本人から同伴ガイドを依頼され、18～28日にネパールを訪れるのに合わせて実現。相手先の孤児施設はチベット仏教の僧院が運営し、6～15歳の約130人が暮らす。過去には大場さんの仲介で大豆島小児童などと絵手紙交流をしていた。同キャンパス生の絵手紙は自分自身や日本の紹介、将来の夢などを想定。大場さんが同施設を訪ねて直接届け、可能な場合は子どもたちが書いた返事を持ち帰る。

4月23日に同キャンパスで事前説明会があり、1～3年生約20人が参加。大場さんはネパールについて多民族国家で農業や観光が基幹産業などと紹介し、「顔が見えなくても、絵手紙に込めた思いは相手に通じると交流の意義を語った。参加を予定する2年生の松田将弥さんは「言葉や文化の違いを超えて思いを届け、視野を広げるきっかけにしたい」と意欲を示していた。

孤児院で撮影した写真を紹介した大場さん